

7. 環境コミュニケーション

教職員の社会貢献活動

本学における教職員の社会貢献活動を表す指標として、各教員の県や市町村などの環境審議会、環境影響評価委員会、リサイクル製品認定委員会などの委員の兼任件数を調査した結果を表1に示します。また、環境関連共同研究・受託研究・受託事業の研究相手方の延べ件数を表2に示しました。これらのデータから、各学部と

も学部の特色や専門性を活かし、特に県内における環境関連委員会などにおいて専門知識を提供していることがわかります。研究面においては県内外、官民に関係なく幅広く社会貢献活動を活発に展開していることがわかります。

●表1. 各学部教職員の環境関連委員会・研究員参画数

学部	人文学部	教育学部	医学部	工学部	生物資源学部	その他	合計
件数	4	15	10	42	55	34	160

参画先

参画先	省庁	三重県	他県	三重県内市町	他県市町村	各種法人	企業	大学	その他	合計
件数	7	66	8	31	2	33	11	0	2	160

●表2. 各学部教職員の環境関連共同研究・受託研究・受託事業数

学部	人文学部	教育学部	工学部	生物資源学部	その他	合計
件数	2	3	53	59	5	122

研究相手方

研究相手方	省庁	公共団体(県内)	公共団体(県外)	独立行政法人	企業(県内)	企業(県外)	その他	合計
件数	5	16	3	25	24	43	6	122

●熊野灘海域における定置網未利用漁獲物の有効活用

大学院生物資源学研究科・生物資源学部／秋山敏男(客員教授)、柿沼誠(准教授)、船原大輔(准教授)、天野秀臣(名誉教授)

近年、日本沿岸域の漁業資源は非常に減少していて、漁家の経営は厳しさを増しています。その中で三重県の定置網漁業は、年間5,000～6,000トンと比較的高い水準を維持してきました。県内にある18の定置網漁場のうち、活動対象地域の熊野市には3漁場のみしかありませんが、県内の定置網総漁獲量(平成20年度で5,373トン)の約30%も占めています。しかしながら、価格の安いカタクチイワシなどの多獲性魚類、ネンブツダイやハリセンボンなどの全く利用されない雑魚類が大量に網へ入るために苦労の割には収益が低く、漁家の経営は決して楽ではありません。特にフグの仲間であるハリセンボンは体にたくさんの刺があり、一緒に網に入っている他の高価な魚を傷つけて商品価値を落としてしまうため、現状では水揚げすることなく現場海域に棄てられています。熊野市では市

役所や漁業協同組合がこれら未利用魚類の有効活用方法を探しており、大学が協力することになりました。

本研究では、ネンブツダイとハリセンボンの形態・生体成分の季節変化を調べるとともに、大学内の「食品デザイン学実習」において、本学学生によるネンブツダイを利用した缶詰製品の企画・試作を行いました。「ネンブツダイのオイル漬け」や「ネンブツダイのつまれ」などは特に高評価を得ており、今後、地域特産品につながることを期待されています。ハリセンボンについては、体長約10cm前後と小型ですが、皮の比率が約40%もあることから、この部位の活用が産品開発には重要と考えています。熊野商工会議所水産部会は、水産製品について既に一定の顧客や販売・流通経路を確保していますので、将来的には本活動で開発された産品の商品化の協力が得

7.環境コミュニケーション

られるように、今後も一層の協力体制を育みます。また、熊野市では平成25、26年には新市場や水産加工施設を建設する予定です。今後は、これらの地域水産業活性化

事業や熊野市が力を注ぐ養殖業振興事業にも協力の幅を広げて行ければと考えています。



定置網の漁獲現場

用語解説【定置網漁業】

魚がやって来る期間または周年、一定の場所で魚の通り道に網を張り、魚の群れを誘導して網にとじこめて獲る漁業。定置網は沿岸にセットされるため漁船で遠くの漁場まで出かける必要がなく、網にやってきた魚群の一部だけが漁獲されるため、いわゆるエコな漁業と考えられています。



ネブツダイ



ハリセンボン



ネブツダイの
オイル漬け缶詰

●ヤギを利用した獣害対策

大学院生物資源学研究科・生物資源学部 生物圏生命科学専攻資源作物学／梅崎輝尚（教授）、長屋祐一（准教授）

三重県はもとより全国の中山間地ではイノシシ、シカ、サルなど野生動物による農業生産活動への獣害は深刻な問題です。多大なコストがかかるうえ、景観にも添わない電気牧柵や金網などの設置ではなく獣害の回避・軽減策として生産現場でヤギの飼養を試み、その効果の検証に取り組んでいます。

対象地域は三重県多気郡多気町で、特にイノシシ、シカの害が著しい下出江欠ノ下の水田で実験を実施して詳細な観察を行いました。もともと野生動物は、自分より大きな体躯の動物がいる場所へは近づかないとされています。この性質を利用して圃場周辺で中型家畜であるヤギを飼うことで野生動物を作物生産圃場から遠ざけて獣害を回避することが可能かを検討しました。

平成23年7月27日にヤギ2頭（オス成獣、メス6月齢幼獣）を対象水田の南東部から5m離れた場所に設置したゲージへ導入して、9月18日まで飼養しました（写真1）。対象水田北中央部と北東部の畦に監視カメラを設置し、野生動物の接近、侵入状況をモニタリングしました（写真2）。

調査対象水田は東西に横長の約12アールで水稻品種コシヒカリが栽培されており、ヤギ導入時には既に穂揃期になっていました。この水田は前年にはイノシシの被害で収量は皆無でした。当年も田植え直後に畦際の株についてはシカの食害がありました。8月26日にコンバインで収穫しましたが、収穫直前

にイノシシによる被害があり収量は205kgでした。獣害のなかった平年の収量が約450kgであることから、獣害を回避することはできませんでしたがヤギ飼養の効果は認められました。

監視カメラの映像を詳細に検討したところ、水田付近の土手に初めて出現したのは8月19日、水田に侵入したのは8月21日でした。ヤギ飼養による抑止効果は認められましたが、ヤギのゲージの設置場所から一番離れた水田北西部から収穫直前に侵入したことがわかりました。

また、イノシシの加害時期や時間帯、被害水田にシカとタヌキも侵入していたことなど詳細かつ新たな知見が確認されています。

これらのことから、ヤギの飼養によりイノシシなどの侵入時期を遅らせ被害軽減効果が認められましたが、今後ヤギの飼養場所をイノシシなどの侵入経路に移すことで、さらに効果を高められると考えられます。この結果をふまえて試験地と類似した条件の中山間地ではヤギの飼養による獣害抑制は汎用性のあることが示唆されました。



写真1：ヤギ飼養ゲージ



写真2：調査対象水田に設置した監視カメラ

地域環境教育への貢献

伊賀研究拠点で体験科学学習

社会連携研究センター 伊賀研究拠点／紀平征希（研究員）

平成23年8月8日、9日に本学伊賀研究拠点において、三重県立上野高等学校理数科の1年生および希望者を対象に、身近な水について実験を通して考えてもらい、水環境への理解を深めてもらうということを目的に★SPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）を実施しました。実習内容は①きき水、②水の汚れ～きれいな水と汚い水を考える～、③水道水の水質とその地理的分布、④家庭排水が自然界に与える影響～溶存酸素に注目して～です。ほとんどの生徒が高校になって初めての実験だったようで、楽しんで実験をしていました。特に、きき水と溶存酸素の

測定する実験が好評でした。

きき水は、水道水や数種のミネラルウォーターの飲み比べですが、水の味に違いがあることに驚いていました。また、溶存酸素の測定では、試薬を入れることにより、沈殿ができたり溶液の色が変わったりする度に歓声をあげていました。



実験風景（H23.8.8,9）

海も山も空も!よくばり自然学校

教育学部 理科教育／伊藤信成（准教授）

本学と包括連携協定を結んでいる尾鷲市で小学生を対象に体験学習活動を行いました。尾鷲市のある東紀州地域は、漁業が盛んな地域ですが、尾鷲ヒノキとして知られる林業も盛んであり、また、夜空がきれいな地域としても知られています。今回の活動は、これら海・山・空からの自然の恵みを、自分の体験を通して再認識してもらうことを目的としています。平成23年度は第1回目の開催ということで8月25日に開催しました。当日は、地元尾鷲の小学生がヒノキの間伐材を使ったマイ箸づくり、尾鷲港で水揚げされた魚を使った干物づくり、漁師料理体験、天文台でのプラネタリウム投影を体験しました。天気の関係で

大型望遠鏡での観望ができなかったのは残念でしたが、参加した子供たちからは「お気に入りの箸がつくれて良かった」、「初めて魚をさばいたが面白かった」、「晴れたら星座をさがしてみたい」などの声が聞かれ、地域の自然を再認識する機会となった様子でした。



小刀を使ったマイ箸づくり体験



干物づくり体験

三重大学教育ファーム

生物資源学研究科 附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター／平塚 伸（センター長）

本学の附属附帯施設農場では、平成20年度に農林水産省にっぽん食育推進事業「教育ファーム推進事業」のモデル実証地区に認定されたのを契機に、子供たちへの農・食への関心を高める取り組みに本格的に着手しました。平成21年度からは津市教育委員会、JA、参加小中学校との間で三重大学教育ファーム推進協議会を設け、教育ファーム推進事業を展開しています。

平成23年度は近隣小中学校を対象に稲、野菜、果樹など日本人の食生活に関係深い作物の栽培、収穫や農産加工などの体験授業を18回行い、延べ550名の児童、生徒が活動に取り組みました。

プログラム

対象	体 験 内 容		コンセプト
小学校 低学年	◎自然の中で育まれる生命を観察 ◎作業の部分的体験、試食	みかん収穫・試食、パン、バター作り・試食、大豆（播種、枝豆収穫・試食、大豆収穫、豆腐作り）	農や食を五感で感じる
小学校 高学年	◎農作業体験（1作目につき2作業以上） ◎作業現場の見学	茶摘み・製茶、梨収穫、稲作（田植え、稲刈り、脱穀）、サツマイモ（定植、観察、収穫）、牛（観察、世話）	農や食への関心を高める
中学校	◎農業生産工程全般（播種・定植、調整、収穫、加工）	大豆（播種、収穫・脱豆）	生業として農や食を意識する

7.環境コミュニケーション

教育ファームの取り組みは、地域の注目を集め新聞各紙に何度か取り上げられました。

また、参加児童にも極めて好評で、食育に対する効果は生徒から届いた礼状や文集などによく現れ、家庭での話題になるなど波及効果の高さもうかがわれました。

さらに、自然に触れることにより農と食への関心を高めるだけでなく、生物や環境への保護意識の向上にも貢献しています。

活動の様子



みかん収穫



パン作り



田植え



サツマイモ定植



大豆収穫



礼状、文集等

環境関連活動・シンポジウム

● 環境セミナーを開催

平成23年6月27日、総合研究棟Ⅱメディアホールにて、環境省事務次官の南川秀樹氏を迎えて、大学産学官連携自立化促進プログラムの一環として「環境セミナー」を開催しました。約130名の本学教職員・学生のほか自治体や企業の環境担当者が参加し、環境の今と未来を考える素晴らしい機会となりました。

※詳細はP7参照



環境セミナー (H23.6.27)

● C.W.ニコル氏の講演会

平成23年7月9日、環境保護活動に取り組む作家のC.W.ニコル氏の講演会が講堂で行われました。

※詳細はP8参照



C.W.ニコル氏



鼎談 (H23.7.9)

● エコプロダクツ2011に出展

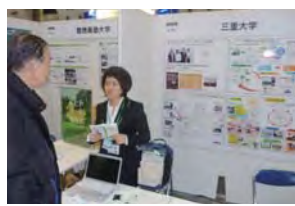
平成23年12月15日～17日まで東京ビックサイトで行われた日本最大級の環境展示会である「エコプロダクツ2011」に本学が大学・教育機関コーナーにブース展示を行いました。「世界一の環境先進大学」を目指す本学の環境に関する取り組み状況をパネルで紹介するとともに、環境報告書(冊子およびCD)やエコバッグなどを配布しました。会場には大勢の方が来場され、環境への意識の高さが感じられました。また、大学の環境対策推進コーナーにおいて、「三重大学における環境ISO学生委員会の活動」と題して中村浩俊 環境ISO学生委員長が発表しました。



ブース展示 (H23.12.15～17)



活動紹介



ブース展示 (H23.12.15～17)

環境関連機関・他大学とのコミュニケーション

● 国際環境技術移転センター (ICETT) との連携

平成23年度JICA中南米地域「循環型社会形成促進のための廃棄物総合管理(B)」研修の一環として、大学での環境意識向上に向けた取り組み事例を学ぶために、「世界一の環境先進大学」を目指す本学が研修先に選ばれました。

平成23年9月29日に国際環境技術移転センター(ICETT)で研修中のチリやグアテマラなど中南米の5ヵ国8名が本学で研修を受けました。研修生は環境ISO学生委員会か

ら海岸清掃や3R活動の取り組みの説明を受けた後、朴恵淑理事・副学長(環境・国際交流担当)から「三重大学の環境活動」について、講演を受けました。その後学生を交えて意見交換をしました。研修生は「若い世代が環境への意識を持っていて素晴らしかった」と話していました。

この研修は平成24年2月16日にもベネズエラの8名を対象に行われました。



3R活動の見学



朴恵淑副学長による講演



学生委員会による説明



受講風景

● Webマガジン「エコジン」から取材

平成23年11月4日環境省発行のwebマガジン「エコジン」(※環境をテーマに隔月で発行)が取材に訪れました。

この中で毎号「エコ×プロジェクト」という、企業・NPO・大学・研究機関などで行っているエコな取り組みを紹介するコーナーに、本学が行っている

◎環境人財の育成

◎キャンパス内の放置自転車の再利用

◎卒業生からの家電の回収と再利用

◎町屋海岸モデル

といった環境活動や、「カーボンフリー大学を目指して」など現在行われていることについて取材を受けました。

当日は、朴恵淑理事・副学長(環境・国際交流担当)から3R活動・カーボン

フリー大学構想について詳細説明をした後、中村浩俊環境ISO学生委員長から、古紙回収コンテナ、花壇、学生委員会室、コンポスト、留学生への自転車譲渡の様子などについて現地で説明しました。

この内容は、エコジン26号P26.P27に掲載されています。

<http://www.env.go.jp/guide/info/ecojin/issues/12-01/index.html>



訪問取材



花壇前にて

● 近畿大学から訪問

平成23年6月1日 近畿大学経営学部の足立辰雄教授と学生6名(エコキャンパス研究チーム)が本学を訪問し、環境ISO学生委員会が本学のエコキャンパスづくりの特徴と仕組みについて説明しました。その後、意見交換会を行い、今後活発に情報交換していくことになりました。



情報交換後記念撮影

7.環境コミュニケーション

インタビュー内容

- ① ISO14001の認証取得のプロセスについて
- ② エコキャンパスづくりで学生を組織する方法について
- ③ なぜ世界一の環境先進大学を目指しているのか
- ④ 風力発電機の設置箇所などの撮影
- ⑤ カーボンフリー大学と3Rの活動について
- ⑥ 地域貢献の取り組みについて
- ⑦ 環境教育を行う目的と活動内容について



エコキャンパスづくりの説明

部・サークルの環境活動

● Blue Planet

本のリユース活動

学内に「B-POST」という本の回収BOXを附属図書館と翠陵会館の2カ所に設置し、学生から不要になった本を回収し、大学祭にて無料提供する活動を行っています。

毎年、500冊以上の本を回収・保管・リスト



回収作業のリスト作業

化を行い、300冊以上の本が提供されています。

また、配布の際にアンケートで環境に対する意識調査も行っています。

他団体との交流

海岸清掃へ参加し、他団体や地域の方々と交流を行っています。

また、クローバーというボランティア団体にも所属しており、震災時には「思い出戻し隊」という団体に参加し、復興のための募金活動に協力しました。

● 三重大学 ウミガメ・スナメリ調査・保全サークル「かめっぷり」

活動内容

かめっぷりは、伊勢湾に棲息するスナメリやウミガメの生態調査、保全活動を行っています。具体的にはウミガメ類・スナメリのストランディング（漂着）調査や、アカウミガメの上陸・産卵調査などを行っています。また、小学校での出前授業やイベントについて、調査によって得られたデータや私たちが持っている知識を地域住民に伝える活動もしています。

平成23年度の活動

アカウミガメの産卵が8件あり、それらの産卵巣の防護ネットと看板の設置を行いました。ウミガメ類のストランディ

ングは6体、スナメリのストランディングは17体あり、それらの調査を行いました。また、9月には日本ウミガメ学生会議を三重県で開き、日本全国のウミガメに関する大学サークルで集い、情報を交換し合いました。11月には鹿児島県沖永良部島での日本ウミガメ会議に参加し、ポスター発表を行いました。



看板設置

● 全学大学祭実行委員会

大学祭での活動

全学大学祭実行委員会は、三重大学祭において『環境に優しい大学祭』を目指して、キャンパス内の各場所に11分別できるごみ箱を設置し、団体と協力しながらごみ

の分別を推進しています。分別したごみはできる限りリサイクルにまわすため、P&Pトレイというリサイクルトレイの推薦、販売も行っています。このトレイは汚れた表面のフィルムをはがし本体を100%リサイクルするタイプのトレイです。

7.環境コミュニケーション

他にも、使用済み油の回収や大学祭において衛生面を安全に保つために消毒液の使用を推奨、そしてキャンパス内の清掃活動を行っています。

● 今後の活動目標

今後の活動としては、エコの活動やごみのリサイクルについて理解してもらうために大学祭においてエコブースを出展する予定です。また、私たち自身も大学祭以外に工

場見学を行い、リサイクルに関して勉強することで、環境に配慮した大学祭にできるよう頑張りたいと思います。



活動の写真 (H23.11.6)

● 応援団の活動

活動における目標と内容

私たち三重大大学体育会応援団は、本学の総合活性化、クラブ・サークルの応援・壮行、地域社会の応援の3つの目標を掲げて日々活動しています。活動内容として、硬式野球部やアメリカンフットボール部を始めとする本学の部活の応援に加え、入学式や卒業式、その他オープンキャンパスや国際交流パーティなど大学の各種の行事、並びに津祭りなど地域の行事に参加献血の呼び掛けやキャンパス内の放置自転車の撤去、町屋海岸の清掃などの大学内外でのボランティア活動にも取り組んでいます。

環境活動

応援団の活動目標の1つ「地域社会の応援」のもと、環境ISO学生委員会と協力して環境活動を行っています。平成23年度では町屋海岸清掃、放置自転車一時保管場所移動に参加しました。今後も本学や地域社会の応援の一環として取り組んでいこうと思います。



三重大大学体育会応援団 (H24.6.12)

◆ 学生によるMIEキャンパス宣言

私たち人類は生まれてから今日まで休むことなく発展を続けてきました。しかし、この発展が私たちの暮らすかけがえのない地球を傷つけ、地球温暖化のような深刻な環境問題を生み出しています。そして現在この深刻な問題は私たちのすぐ傍まで来ています。このような状況の中で、空・樹・波の三翠に恵まれた我が三重大学は、かけがえのない地球を守るため、三重県内唯一の総合大学として環境先進大学を目指します。

私たちが環境先進大学を目指すにあたり、**Nature Judges our Future—自然が私たちの未来を判断する—**という目標を掲げます。これは私たち人間だけが環境への良し悪しを判断するのではなく、自然も同じように判断するというものです。例えば、「10年後にウグイスが棲むキャンパス」というように、動物や植物に私たちの活動を判断してもらうことで、本当の意味での環境改善が図られるのではないのでしょうか。そして、この先にある人類と自然の共生を目指して私たちは活動を行っていきます。このように一歩先を見る環境先進大学を目指すにあたり、Nature Judges our Futureの更に一歩先を行くという思いを込めて、**NをMへ、JをIへ、FをEへ**、それぞれの頭文字を繰り上げた、自然と共生した環境先進大学“**MIEキャンパス**”を創造していくことを宣言します。

そのために、学生一人ひとりの環境意識を高め、一人ひとりが自主的に考え、行動しやすい空間を創造します。具体的な取り組みとして、ごみの減量、資源の再使用、リサイクルを徹底することにより、このことが当たり前と実感できるキャンパスを目指します。また、こうした三重大学で培った環境マインドを学内だけでなく、積極的に地域社会に広げていくことで、より豊かな地域社会づくりに貢献していきます。

この活動を地球上のすべての生き物へ、未来の世代へ、そして地球へ伝える“**MIEキャンパス**”を実現します。

2006年2月21日 三重大大学環境ISO学生委員会

附属学校の環境活動

●附属幼稚園の取り組み

附属幼稚園では、野菜の栽培、生き物の飼育などの直接体験を通して、好奇心・探究心・考える力・表現力を養うとともに、幼児期から自然環境や身の回りの環境に

興味や関心を持ち、自然を大切にする気持ちを育むことが大切であると考え、環境教育に取り組んでいます。その一部を紹介します。

●堆肥作り

幼稚園には樹木が多く草場もたくさんあります。樹木の葉っぱや草を積み上げて作る堆肥は、子供たちが野菜を植える畑の栄養になります。



●蚕の飼育

附属学校・園にある桑の葉で蚕を育てています。40日程の間で、卵、繭、羽化、交尾、産卵と早いサイクルでの成長や桑の葉を食べ続けるように、子供たちは命を感じます。繭で、コサージュを作り、修了式で子供たちの胸を飾ります。



●野菜の栽培 → ●調理 → ●みんなで試食

子供たちは、自分たちが育てた野菜を味わうことも大きな喜びです。毎年6月に行うカレーパーティーは子供たちの大好きな行事の一つです。



＜収穫＞



＜調理(切る)＞



＜調理(煮込む)＞



＜みんなで試食＞

●附属小学校の取り組み

4年生は、社会科で「ごみのしまつと活用」について学習します。

まず、「1週間のごみ調べ」を通して、自分の家からどんなごみがどれくらい出ているのか、身近な問題として考え始めました。曜日によってごみの量が違ったり、種類によって量が違ったりすることに気づきました。また、家庭によってごみの種類もその量も違うということにも気がつきました。

続いて、家から出たごみをどのように処理するのかということについて考えるために、小学校周辺のごみ集積所を見学しました。ごみ出しの約束が書かれていたり、掃除道具が置いてあったり、フェンスで囲まれていたりすることに気づくとともに、なぜそのようになっているのかを考えました。「警告」シールが貼られているごみを見つけ、ごみ出しのルールに注目しました。どのようなルールがあるのかを確かめるために、子供たちは自主的にごみ収集カレンダーを持ち寄りました。どの地域にも共通して言えることは「分別」をすることであるとわかりました。また、地域によって集

める曜日が違うことなどに気がつきました。各地域で使われているごみ出し用の袋を持ち寄ることで、それぞれの自治体によって少しずつやり方が違うということにも気づきました。

ごみ収集カレンダーを見らる中で、ごみがどこで処理されるのかに興味を持ち始めました。そこで、ごみ収集車の小学校への派遣授業、白銀環境清掃センター、西部クリーンセンター見学を行いました。ごみ収集車の派遣授業では、実際にごみ収集車がどのように動くのかを見せてもらい、ますます関心を強くしました。白銀環境清掃センター・西部クリーンセンター見学では、自分たちの家から出たごみが最終的にどのように処理



ごみ収集車の話

7.環境コミュニケーション

されるのかということを知るとともに、鉄、アルミ、ペットボトル、プラスチックなど、多くの“ごみ”が“資源”として再利用されていることを学びました。

毎日の生活の中で必ず出てくるごみですが、「ごみのし

まつ」の流れを知ることによって、分別の大切さを改めて感じることができました。同時に、ごみを減らすためにどんなことができるのかを考えることができました。考えたことを、今後も実践していこうとしています。



熱心に聞きました



ごみ収集車の内部



運転席を見学

● 附属中学校の取り組み

附属中学校では、毎年6月に学校周辺の清掃活動「クリーン大作戦」を続けてきています。今年は、自然を愛する附属中学生が愛する学校とその周辺を活発的に掃除し、きれいな学校にしていこうという意味をこめたC (change) L (love) E (enjoy) A (active) N (nature) をスローガンにクリーン大作戦を計画しました。参加を呼びかけたところ、多くの生徒が参加申し込みをしており、みんなで協力し、貢献していこうという意識の高さがうかがえました。

また、リサイクル運動として、ペットボトルキャップの回収活動を行っています。このエコキャップ運動では、リサイクルでごみを減らすことはもちろん、赤十字に送ることでワクチンに換え、発展途上国の子供の命を救うこともできます。そのため、ごみを減らし命を救うために少しでも多くのキャップを回収できるよう活動しています。また、リサイクルするためのマナーとして、きちんと洗浄したりシールをはがす必要があることも広めようとしています。

● 附属特別支援学校の取り組み

附属特別支援学校の玄関付近は、花がいっぱいです。

総合的な学習の時間に「つくる」グループが、ドリルや金槌を使ってフラワースタンドを作りました。

「ひまわりの家」という日常生活訓練棟の前にある花壇にも、季節の花がきれいに咲いています。それは、朝の係活動の時間、園芸系の生徒が、肥料を混ぜて土作りをしたり、球根や苗を植えたり、草抜きや水やりをしたりして世話をしています。

美術の時間にはその花を写生したりしています。

生徒と教員が一緒に、花いっぱい環境づくりに取り組んでいます。



● 花いっぱい描こう ●



● 手作りのフラワースタンド ●



< 水やり >



< 床作り >



< 種まき >

● 園芸系の活動 ●